いちごの基礎情報

いちごは、バラ科オランダイチゴ属に属する多年生の草本植物です。

流通・消費分野では果物とされますが、農業分野では野菜として扱われます。

現在栽培されているいちごは、わずか二百年前にヨーロッパで栽培用として作り出された、非常に新しい植物です。

「**クラウン**」
短い茎の部分。

「**果床**（かしょう）」
一般的に果実と呼んでいる部分。
痩果を支える部分で、花床（かしょう）が発達したもの。

「**痩果**（そうか）」
粒の部分。
種子だけのように見えるが、未発達な果肉に覆われている。
本当の果実はこちら。

いちご栽培の年間スケジュール

※促成栽培・ポット育苗の場合

3月	5月	8月	9月	12月	5月
親株を植える →	ランナーを出す →	子株を採る →	子株を植える →	収穫 →	

いちご栽培の特徴

① 「親株」と「子株」

② 「ランナー」

③ 「土耕栽培」と「高設栽培」

④ 「ミツバチ」

いちご栽培の特徴①　「親株」と「子株」

いちごを栽培するときは、種から育てるのではなく、「親」となる株（=「**親株**」）を購入し、この親株から**栄養生殖***によって「子」となる株（=「**子株**」）を増やす方法が一般的です。

*栄養生殖とは、生物の体の一部から子孫ができること。

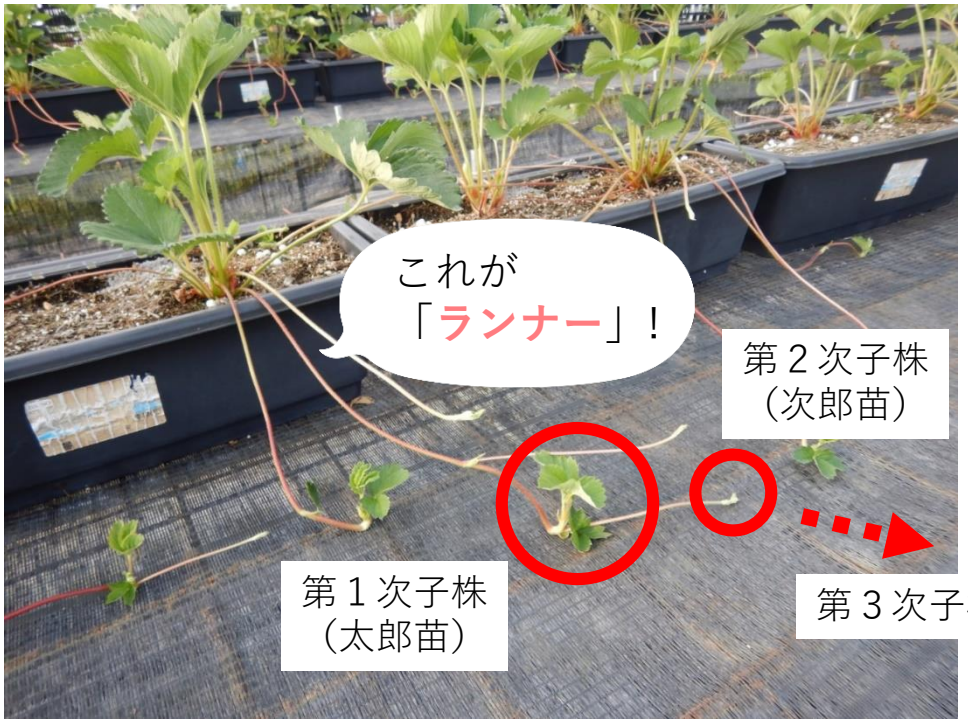
親株

子株

いちご栽培の特徴②　「ランナー」

親株からは「**ランナー**」（走出枝または匍匐枝）が伸び、その先に**子株**が形成されて増殖します。子株からもさらにランナーが発生して、次々に子株を形成します。

親株から伸びたランナーの先にできた子株を**太郎苗**、太郎苗から伸びたランナーの先にできた子株を**次郎苗**、次郎株からさらに伸びたランナーの先にできた子株を**三郎苗**と呼ぶことがあります。



いちご栽培の特徴③　「土耕栽培」と「高設栽培」

いよいよ**ランナー**を伸ばすことによって増やした**子株**を畑に植えます。

いちごの栽培方法には大きく「**土耕栽培**」（地面の土に植える方法）と「**高設栽培**」（棚を作って、その上に土などを入れて栽培する方法）の２種類があります。

どちらの方法にもメリット・デメリットがあり、生産者のこだわりポイントでもあります。

土耕栽培

高設栽培

いちご栽培の特徴④　「ミツバチ」

10～11月頃にいちごの花が咲き始めますが、正しく**受粉***できないと**果床**（いちごの果実）部分がきれいに大きくなれません。

実は、この受粉のお手伝いに「**ミツバチ**」が大活躍しています。

*受粉とは、おしべの花粉がめしべの先端に付いて種子や果実ができること。